

豊明希望チャペル礼拝

2026／8／16

「豊かな実を結ぶために」

ルカの福音書 8：4～18

本日は、イエス様が語られた「種まきのたとえ話」です。燭台(あかり)の譬えも加えて教えられたいと思っておりますが、10 節から始まる、種まきの譬えと燭台の譬えが、10 節から、18 節で締めくくられておりますので、燭台も含めて、そこまでの一連の教えとして教えられましょう。

ちなみに、その最後の 18 節がこう締めくくられていて、ルカの福音書では、これが、種まきと燭台の二つの話しのまとめ？とされているように見えますので、そこをまず読んでから、教えられてまいりましょう。

「8:18 ですから、聞き方に注意しなさい。というのは、持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っていると思っているものまで取り上げられるからです。」

一言で言うと、それは「**聞き方**」に注意しなさいと言うことです。「聞き方」に注意というのは、11 節のイエス様の解説にあるように、「聞いて信じる」事の大切さです。聞きっぱなしにしないということです。聖書は、その多くの箇所が、聞く者に決断、応答を要求しています。たとえば、一日のはじめに、聖書を開いて、知ってる・・・いい話だったな・・・で終わらないように、じゃあ、具体的に、今日、何をしたらいいかと考える、あるいは決断すると言うことです。

それでは種まきの譬えから・・・そして、今日は、それぞれの譬えに対して、イエス様の解説がついている箇所ですので、その箇所も併せて読みましょう。

1. 道端に落ちた種



「8:5「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いていると、ある種が道端に落ちた。すると、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。」



「8:11 このたとえの意味はこうです。種は神のことばです。8:12 道端に落ちたものとは、みことばを聞いても信じて救われないように、後で悪魔が来て、その心からみことばを取り去ってしまう、そのような人たちのことです。」

この道、岩、茨の順は、程度の思い順のように見えます。「道」は、畑に比べれば固いですから、頑固な心を意味しているように見えます。あるいは、先入観が強いとか、別の言い方をすれば、自分の都合の良いように読むということを意味するように思います。また、ルカの福音書の、この種まきの譬えは、ルカの特長として(イエス様が別

の機会に話された中にあった言葉かも知れない・・)、「人に踏みつけられ」という言葉が付け加えられています。ルカは、御言葉の価値を評価しないで、通り過ぎてしまうという点に力点をおいているように思います。ですから、読んでも、形式的に読んでいてだけで、理解しようとさえしない、考えようともしないと言うことを表しています。朝の忙しい時間に御言葉を読むと、こうなりがちですから、時に、少し時間を多めにとって、じっくり御言葉に向き合って、考え祈る時間が大切だと思います。

2、岩の上に落ちた種



「8:6 また、別の種は岩の上に落ちた。生長したが、水分がなかったので枯れてしまった。」

「8:13 岩の上に落ちたものとは、みことばを聞くと喜んで受け入れるのですが、根がないので、しばらくは信じていても試練のときに身を引いてしまう、そのような人たちのことです。」

道よりもさらに固い地ですが、「生長した」とありますから、道では、先に鳥に取られています。ここでは、イエス様がおっしゃられているように、喜んで受け入れています。しかし、枯れる。それは、根がない、あるいは、試練の時に身を引いてしまう聞き方だとイエス様はおっしゃられます。パリサイ人が、イエス様を家に招いて、イエス様から御言葉を聞いたけれど、罪深い女が来ると、喜んで迎えるイエス様を批判して、人は、イエス様によってこそ、罪が赦されるというところにまで、理解が及びませんでした。そのことに似ているように思います。



豊かな言葉が、
さながら宝石のように散りばめられている。

道に落ちた種の例では、はじめから、御言葉を軽く見っていますが、ここでは、喜んで聞いているわけですから、多少、大切にしています。しかし、「大切」それ以上の価値をおきません。大切以上に、貴重、あるいは、逃してなるものかと言う程に、御言葉への価値観がなかったということです。その時にわからなくても、いつか分かるようになると心得て、宝石のように、宝箱に忍ばせて、また、時がたったら、箱を開けて、その価値を喜び、再確認する。そんな心がけが大切ではないでしょうか。

3、茨(いばら)の中に落ちた種



芽が出たし
強もつきました。

叶れよ

「8:7 また、別の種は茨の真ん中に落ちた。すると、茨も一緒に生え出てふさいでしまった。」

「8:14 茨の中に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らはみことばを聞いたのですが、時がたつにつれ、生活における思い煩いや、富や、快樂でふさがれて、実が熟すまでになりません。」

岩が、人生の中で出会う、病気や迫害や、そうした試練であれば、こちらは、誘惑です。もちろん、生活が支えられて、思い患いがなく、富も豊かで、楽しいこともいっぱいある生活。それは、祝福でもあります。ある意味、信仰生活の実だとも言えます。

マタイの福音書「**6:33 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。**」とある通りです。

しかし、その祝された生活の豊かさ、富と楽しい信仰生活で、ゴールとなってしまつて、それ以上生長しないと言うことです。このイエス様の言葉に目を留めたいのです。

「**実が熟すまでになりません。**」との言葉です。実は、一応結ぶが、そして、その実を食べれば、一応、栄養にはなるが、熟していないというのです。実はあるが、美味しい、グルメだというほどではないというのです。



数年前に召されたドイツのクレーマン宣教師が、あるとき、私たちクリスチャンは、聖書に基づいた正しい人生、あるいは聖書の豊かな人生を歩みたいが、その先にある美しい人生を目指したいと言われたことがあります。

クリスチャンのめざすべき歩みとして、豊かさや正しさはあっても、美しさという表現ははじめてでしたので、先生に、新しく教えられましたとお伝えしました。先生は、豊かさや正しさは、比較的早く実現できるが、その人の人生が美しかったと言われるような人生、信仰生活は、むづかしいと言われたように記憶しています。

まさに、イエス様がここで言われているように、「**実が熟すまでにならない**」ということではないのでしょうか。実は実っているが、最低限で、それ以上ではないということです。栄養にはなるが、熟して、豊かな香りまでは生じない、人に羨ましい、ああいうクリスチャンになりたいという程に、美しさはない、そういうクリスチャンだと言うことでしょうか。

茨の譬えは、順番は、誘惑は試練の次ということですが、時に試練よりも深刻な場合もあります。試練の時には、祈り、願い、耐えることが出来ても、楽しいこと、生活、富、快樂の中で、むしろ、御言葉を忘れていくのかもしれないと考えるからです。

さて、私たちの信仰生活は、どの段階にあるのでしょうか。



最後に、イエス様は、私たちのクリスチャンの生活が、祝された場合の、その祝福の度合いは、道、岩、茨の時とは、段違いだと言われます。

4, 良い地に落ちた種

「**8:8 また、別の種は良い地に落ち、生長して百倍の実を結んだ。**」イエスはこれらのことを話しながら、

大声で言われた。「聞く耳のある者は聞きなさい。」

「8:15 しかし、良い地に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らは立派な良い心でみことばを聞いて、それをしっかり守り、忍耐して実を結びます。」

「生長して百倍の実を結んだ。」

御言葉の価値についてイエス様は、ここで、私たちに、見積もりの甘さを指摘されます。道の段階を克服して、岩の段階をも乗り越えて、茨の段階を経て、その上のレベルの良い地の場合、それまでが、数値にすれば、**0.00(道)**、**0.10(岩)**、**1.00(茨)**としたら、いきなり、**100.00(良い地)**だと言うのです。

信仰生活の祝福は、増え始めると、足し算引き算のレベルから、かけ算の、乗数的に増えると言われるのです。



そもそも、この譬えを、種まきと、その収穫に譬えたとき、多くの植物は、例えば、お米であれば、一粒から 300 粒以上になると言われます。御言葉に聞き、御言葉に歩む信仰生活の祝福も同じように、乗数的に祝される、5 倍 10 倍ではなく、100 倍単位で祝される

ということではないでしょうか。

最後に、御言葉の聞き方についての、その文脈での、もう一つの譬えについて見ましょう。それは、明かりの譬えです。

5. 明かり

「8:16 明かりをつけてから、それを器で隠したり、寝台の下に置いたりする人はいません。燭台の上に置いて、入って来た人たちに光が見えるようにします。8:17 隠れているもので、あらわにされないものはなく、秘められたもので知られないもの、明らかにされないものはありません。8:18 ですから、聞き方に注意しなさい。というのは、持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っていると思っているものまで取り上げられるからです。」



の、明らかにされないものはありません。8:18 ですから、聞き方に注意しなさい。というのは、持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っていると思っているものまで取り上げられるからです。」

明かりは、明かりそのものの価値と言うより、その明かりが照らしたものの価値によって測られます。

その明かりに照らされてこそ、有名な作家の小説、夏目漱石の「心」も、「坊ちゃん」も、「吾輩は猫である」も、価値を持ちます。暗やみでは、どんな良い小説も役に立ちません。



同じように、御言葉も、ここで示されているように、せっかくの、その明かり、すなわち御言葉が、私だけの満足、私だけの喜びにとどまっているなら、ここで、イエス様があげられているように、せっかくの明かりを、桷(ます：木で出来た入れ物)、2017 訳では「器」としていますが、いずれにしても、桷や器の中だけを照らすことで終わってしまうとい



っておられるのです。もちろん、私だけが御言葉を理解するのも良いですが、せっかくの素晴らしい御言葉、私だけでなく、人と分かち合えば、私も、ああそういう見方もあったのですね、ああ、あなたも素晴らしいと思いますか、私も同じですと、御言葉の素晴らしさを、より強く、豊かに味わうことが出来るのです。

御言葉について、互いに学び合う、祈祷会のような機会は、本当に祝福です。私も、いっぱい教えられ、より御言葉が印象づけられて私の強さになると思っています。さらには、まだ御言葉を知らない人にも、光をかかげ、お伝えできればもっと幸いです。(←ミケランジェロ「燭台を持つ天使」)

さて、今日は、「聞き方」という点をキーワードに、イエス様がまいて下さった御言葉、あるいはイエス様ご自身と言うべきか、イエス様ご自身である御言葉、すなわち、イエス・キリスト、神さまの価値を、どの程度に評価し、どのくらい大切に従い、歩んでいるか、0.1 から 1.0 へ、いや、その 100 倍も価値があると教えられたのです。

今週の歩み。どんなときにも、会社にあっても、家事にあっても、あるいは、通りの喧噪(けんそう)の中にあっても、悩みや悲しみのなか、悪いときも、良い時であってさえ、神様の小さき御声にこそ耳が開き、その声に聞いてこそ歩む、御言葉と神様にこそよく聞き信頼して歩む、祝福された歩みをここから歩み始めさせて頂きましょう。